彼岸花の空

椎名

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
彼岸花の空

【Ｎコード】
Ｎ８８８２Ｚ

【作者名】
椎名

【あらすじ】
悲しい思い出、独立、そして再会。

（前書き）

ご閲覧頂き誠にありがとうございます。

私は屋上が好きだった。滅多に人が来ないし、彼女がいたから。
「まぁ、いらっしゃい御幸（みゆき）」
「今日は何をしているの？　梓って、いつも何かしてるよね」
屋上の柵に寄りかかって微笑む梓は、私を見つけてゆったりとした足取りで近づいてきた。その手に毛糸を持っている。
「だって、暇なんだもの。今日だって、一日中あやとりをしていたからきわめてしまったわ」
憂うように目を細め、彼女は空を見上げる。嫌になるくらい晴れ渡った空の青が、梓の美しい黒髪に反射して輝いてきた。
それから、梓は私にいろいろなことを教えてくれた。二時限目の体育のとき、一組の美作君（みまさか）が何回もシュートを決めていたことや、今日習得したあやとりの橋の作り方。他にもたくさんの話をした。
「梓は、器用ですね」
私は、器用にあやとりをする彼女の手を見て言った。どんなことでも難なくこなしてしまう彼女を、私は純粋に尊敬していた。
「ずっとお家にこもって、こんなことばっかりしていたわ。　お勉強だって家庭教師がついてベッドの上だったし、運動だって全然させてもらえなかった。お友達もいなかったし、お父様は仕事ばかり気にして相手をしてくれなかったの」
私が器用だと言うと、彼女は決まって同じことを言った。今にも柵を壊しそうな勢いで愚痴を零すのだ。初めて聞いたときは驚いたが、今では慣れたことだった。
「あ、そうだわ。ねぇ御幸、今日はどんな“できること”をしたの？」
私が隣に座って俯いていると、彼女は思いついたように問いかけた。“できること”をするというのは、私と彼女を繋ぐ約束だ。初めて梓と会った日、悩みをぶつけた私に彼女は“できることだけす

ればいい”と言った。それから私は授業中の発言やちょっとした趣味を頑張るようになった。自分でも、これまでの私とは変わったと実感するほどだ。

「今日はね、“家族”っていうテーマの作文の発表があって、褒められたんだよ。すごく、嬉しかったです」

私が息を弾ませて言うと、彼女はふっと笑った。

「そう、それは良かったわね。じゃあ、次はその敬語交じりを止めましょうか？」

「あ……えっと、これは癖で……」

くすくすと悪戯っぽく笑う彼女に、私は慌てて言った。身振り手振りでどうにか伝えようとする。

「うふふっ……ごめんなさい。つい、からかいたくなってしまって……」

「もう……」

彼女の言葉に、私はうなだれるようにして肩の力を抜いた。気を取り直し、話を変える。

「……それでね、私、家族のことを思い出してたの。父さんが再婚相手だってこと。どこかに異父姉妹がいること。全部、全部振り返ってみたの」

遠い空の彼方を見上げて、大きく深呼吸をする。梓は何も言わなかった。

「なんだか、寂しくなってきたわ。遠い世界のことだなんて――思えなかった」

ずっと幼い頃、何も分からずただうなずくだけだった私は、今になってようやくその切なさを実感していた。

「私の異父姉の人の名前、ようやく思い出せたよ」

母さんはもう一人の娘のことを滅多に話さなかった。その名を聞いたのはずっと幼い頃、一度きりだ。

「その人は――」

「水凪梓というの」

私の言葉を遮って、彼女が言った。長い黒髪を風になびかせて微笑む。分かっていたことだったが、実際に本人から言われると涙が出た。

「さようなら、私の大切な妹」

風に乗った言の葉は遠い空の果てに消えた。かつて彼女がいた陽だまりには、ただ一輪の彼岸花が微笑んでいた。

目を覚ましたのは自宅のベッドの上だった。私は慌てて時計を見る。今日は五月十六日。私が梓と会った日だ。全ては夢だったのかと思い、机に視線を向けて目を見張る。そこには、たった一輪の彼岸花の花瓶が置かれていた。

（後書き）

最後までお読み頂き誠にありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8882z/

彼岸花の空

2011年12月29日05時49分発行